

桂太郎、後藤新平、八田與一……

台湾に根づく先人たちのスピリッツ。

列強の植民地支配とは一線を画した、日本の台湾統治。五十年に及ぶその歴史の中で、桂太郎、後藤新平、新渡戸稲造など当時の日本における第一級の人材が来台し、インフラ、教育など社会資本整備のあらゆる側面において、近代化を進めていった。今も彼の地で語り継がれる彼らの功績を、あらためて辿っていく。

台

湾は、日清戦争の勝利で締結された日清講和条約（明治二十八年）で日本により割譲され、それから終戦を迎える昭和二十年までの約五十年間、日本の統治下におかれました。この日本の台湾統治は、欧米列強が行っていた植民地支配とは考え方が違います。まず、植民地という言葉を使いません。なによりも、台湾を本国日本と同じ社会レベルにするため、一級かつ実践的な人材を送り込み、莫大な金額をかけて社会資本整備を行いました。当時の日本人の租税負担率が五割という圧倒的に苦しい時代に、です。

フロンティア開発の夢を、台湾で実現。

に施行された教育制度は、台湾住民が産業社会・近代社会に適合する精神と才能を身につける機会となりました。昭和三年に台北帝国大学が設立されましたが、大阪と名古屋の帝国大学設立以前の設立です。列強の宗主国でそんなことをやった国はありません。

樺山資紀、桂太郎、乃木希典まで三代の台湾総督の三年間の課題は、住民の抵抗を力で抑えて台湾の治安を守ることになりました。本格的な台湾統治経営がはじまるのは、明治三十一年二月、児玉源太郎が第四代台湾総督に就任してからです。児玉は右腕となる民政局長（後の長官）に後藤新平を任命し、後藤は新渡戸稲造はじめ有能な人材を次々と台湾開発に登用していきます。医学者でもある後藤は、台湾を「生

物学的」に統治しようと考えた。「個々の生物の生育には、それぞれ固有の生態的条件が必要であるから、一国の生物をそのまま他国に移植しようとしてもうまくいくはずがない。他国への移植のためには、その地の生態に見合うよう改良を加えなければならぬ。つまり、日本の慣行、組織、制度を台湾のそれに適応するよう工夫しながら、統治経営がなされるべきだ」という考えです。後藤は台湾の現状を徹底的に調べ、土地・林野・人口などの基礎調査事業と並行して、道路、鉄道、上下水道、汽船などのインフラ整備のほか、衛生環境と医療の改善を急ぎ取り行いました。

台北市の主要道路のひとつである台北駅前忠孝西路は、後藤新平の都市計画に沿って造られた、幅四〇メートルの三線道路です。後藤は関東大震災後の復興計画で、東京で同じ規模の道

渡辺利夫、丹羽文生 談

talk by Toshio Watanabe, Fumio Niwa

わたなべ としお 拓殖大学総長。1939年山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て、2005年4月より拓殖大学学長。11年11月より第18代拓殖大学総長を兼任。13年3月に学長を退任。JICA国際協力功労賞、外務大臣表彰、第27回正論大賞など受賞多数。著書に『成長のアジア 停滞のアジア』（吉野作造賞）、『開発経済学』（大平正芳記念賞）、『西太平洋の時代』（アジア太平洋賞大賞）、『神経症の時代』（開高健賞正賞）ほか多数。

にわ ふみお 拓殖大学海外事情研究所准教授。1979年石川県生まれ。東海大学大学院政治学研究所博士課程後期単位取得満期退学。作新学院大学総合政策研究所研究員などを経て、2012年より現職。青山学院大学非常勤講師、台北市台日経貿文化交流協会顧問。著書に『日中国交正常化と台湾——焦燥と苦悶の政治決断』



後藤新平 明治31年、児玉源太郎台湾総督により民政局長に抜擢され、のち民政長官。幹線道の整備や縦貫鉄道の敷設、基隆港の再整備、日本に先駆けての上下水道の整備など、台湾に残した業績は多岐にわたる（所蔵・国会図書館）



台湾阿里山を視察する後藤民政長官一行。中央左、ステッキを持っている人物が後藤新平。台湾総督府殖産科技師によって発見された阿里山の大本林の本格調査は1903年に開始され、04年9月、後藤一行による踏査が行われた（所蔵・後藤新平記念館）

桂太郎 第2代台湾総督。4ヵ月と短い任期ながら、台湾のインフラ整備に力点を置いた「台湾統治二関スル意見書」を提出した。明治33年、台湾協会会頭として台湾協会学校（のち拓殖大学）を創立。初代校長に就任した（所蔵・国会図書館）



マンを持って台湾開発に従事し、台湾を有機的な社会にまとめるべく粉骨砕身した日本人が多かったのだと思います。五十年の台湾統治で、どうしても後藤新平の業績がクローズアップされますが、後藤思想は、桂太郎思想を受け継いでいることに注目したい。桂の総督としての任期（明治二十九年六月）は四ヵ月ととても短いのですが、その間、伊藤博文と西郷従道に随行、後藤新平を同道して台湾を視察し、内閣に「意見書」を提出しています。台湾統

治の施策として桂が提起したものが、（一）地方行政機関の整備、（二）警察機構の増強、（三）衛生医学行政の整備、（四）アヘン問題の早期解決、（五）海運航路の拡充および鉄道と幹線道路の整備、（六）主要港湾の拡充の六項目です。特筆すべきは、力で抑えるにしても、警察力であって軍事力によってではないことです。私が不思議に思うのは、武力をもって献身するはずの生粋の軍人だった桂が、いかに力を排して台湾を統治しようかと考え、こういう意見



上・新渡戸稲造。後藤新平からの強い要請で、台湾総督府技師として活躍。新渡戸が提出した「糖業改良意見書」をもとに糖業の基礎が作られ、台湾は世界有数の生産地となった。(所蔵・国会図書館)
下・第7代台湾総督・明石元二郎の墓地の鳥居(左)。明石は福岡で病没したが、遺言により台北市三板橋の日本人共同墓地に葬られた。鳥居は一時期、台北228和平紀念公園に移設されていたが、現在の林森公園に戻されている(写真・中川道夫)



書を出すに至ったのか、ということですが。桂は山縣有朋の「腰巾着」と揶揄されるなど、過小評価されすぎです。桂太郎の再評価とともに、桂の台湾開発思想の延長線上に後藤新平がいる——つまり、後藤新平の生物学的植民地経営論の淵源は、桂太郎にあることを知っておく必要があると私は思うのです。

蛇足ながら、私が総長を務める拓殖大学は、桂太郎を会頭とする、台湾の現状分析や開発のための政策提言などを行う「台湾協会」(明治三十一年)が、台湾開発という日本にとっての大事業を完遂させるべく設立した人材養成機関「台湾協会学校」(明治三十三年)を前身としています。

台湾で語り継がれる先人たち

近年、台湾から逆輸入のような形で日本でもその偉大な業績が知られるようになった人物が、台湾総督府内務局土木課の技師・八田與一です。彼もまた台湾開発に粉骨砕身した日本人のひとりですが、洪水、早魃、塩害の三重苦に悩まされていた台湾南部の嘉南平原に、東洋一と言われる烏山頭ダムを建設するために心血を注いだのです。大正九年の着工から途中、関東大震災による工事費削減で従業員をリストラ



せざるを得ない状況に追い込まれたとき、日本と台湾の作業員を差別せずに、再就職が可能な優秀な作業員から解雇していった。そうでない者は、失業すると生活できなくなるという判断からです。地元では神さまと同格を意味する八田公と呼ばれ、いまだに台湾の人たちは、彼に尊敬の念を抱いています。

八田與一のほか、糖業振興の新渡戸稲造、蓬莱米を開発した磯永吉など数多くのテクノクラートがいます。さらに、グラスルーツ(草の根)で活躍した日本人が台湾では記憶され、伝えられています。嘉義に赴任した森川清治郎という巡査は、集落の租税の軽減を台湾総督府に訴えたものの叶わなかったため、責任を取って自決した。地元の富安宮では、現在も森川を御神体として祀っています。同様の話はまだまだあります。そしてこれらのことが今

右・烏山頭(うざんとう)ダムのほりにある八田與一の銅像。八田は台湾総督府内務局土木課の技師。嘉南平原に、堰堤長1200メートル超の、当時は東洋一の規模である「烏山頭ダム」と、総延長1600キロメートルにおよぶ給排水路を完成させた。
下・烏山頭ダム。不毛の荒地だった嘉南平原は、八田與一が立案から現場指揮まで手掛けた烏山頭ダムと水路網により、台湾一の穀倉地帯となった(2点とも写真・片倉佳史)



でも台湾で語り継がれているということに私は感謝したい気もちです。

台湾で語り継がれる先人たち

日本と台湾の関係には、論理的に説明できない精神遺産が存在しているように感じられます。台湾の空港に降り立ったときの、自分の回りを流れている親和的な空気。この皮膚感覚は、不思議な感覚としか言えません。「初めてなのに懐かしい」というキャッチコピーがあるようですが、人間は本能的に過去や故郷に戻りたいという回帰欲求がある。台湾が故郷でない日本人のなかにも、不思議なことに、故郷に帰ってきたと感じるひとが多い。台湾になぜ惹きつけられるのか——言語化するのには難しいですが、不思議な心理的作用ですよ。

たとえば日本では、古代史や戦国史などの歴史ブームが定期的に起きますが、日本のように連続的な歴史を持つている国の人たちのDNAのどこかに、歴史に魅了されたいという潜在的なセンチメントがあるのだと思います。しかし、世代間のつながりが希薄になり、歴史が分断されつつある日本の国内では、それを見つけないと思っても見つけることができない。それが台湾に行くと、「おや、ここにはある」という気分になる。

優れた地域研究というのは、互いを合わせ鏡のようにして見ることです。日本の中にあると日本のことがわからないう。台湾という合わせ鏡を持つことで、はじめて日本のおよび伝統を自覚させられる。「日本が失ったものが台湾にある」。この感覚ですね。日本人が台湾に惹きつけられるのは、●

日本の台湾統治史

- 一八九五(明治28)年、日清戦争後の日清講和条約により台湾・澎湖諸島が日本に割譲。初代台湾総督樺山資紀が台北にて台湾総督府政式を行う。
- 一八九六(明治29)年、陸軍中将桂太郎。第二代台湾総督就任。「台湾の経営方針と政策実行の方法」に関する意見書を伊藤博文首相に提出。
- 一八九八(明治31)年、第四代総督児玉源太郎、民政局長後藤新平が着任。
- 一八九九(明治32)年、株式会社台湾銀行営業開始。
- 一九〇〇(明治33)年、台湾協会学校(のち拓殖大学と改称)、東京に設立。
- 一九〇二(明治35)年、台湾神社社殿完成。
- 一九〇八(明治41)年、台湾縦貫鉄道四〇五・九キロが全通。児玉源太郎と後藤新平の偉功をたたえる博物館開館。
- 一九一〇(明治43)年、台湾初の人口調査。三百十万人。
- 一九一二(大正元年)、阿里山鉄道全通。
- 一九一九(大正8)年、台湾総督府庁舎、八年の歳月をかけて竣工。
- 一九二二(大正12)年、皇太子裕仁(昭和天皇)が台湾を視察。
- 一九二四(大正13)年、基隆・台北と蘇澳を結ぶ宜蘭線が全通。
- 一九二五(大正14)年、治安維持法が台湾でも施行される。
- 一九二八(昭和3)年、台北帝国大学開設。
- 一九三〇(昭和5)年、八田與一により烏山頭ダム完成。霧社事件発生。
- 一九三四(昭和9)年、日月潭水力発電所が竣工。
- 一九三五(昭和10)年、新竹・台中州大地震。「台湾始政四〇周年記念大博覧会」開催。
- 一九三七(昭和12)年、皇民化運動実施。
- 一九四一(昭和16)年、小学校、公学校の区別廃止。高砂義勇隊、フィリピン戦線に出撃。
- 一九四二(昭和17)年、陸軍特別志願兵制が実施される。
- 一九四三(昭和18)年、台湾教育令改正。六年制の義務教育が実施される。
- 一九四四(昭和19)年、志願兵制を徴兵制に改める。
- 台湾住民にも衆議院の選挙権が認められる。
- 一九四五(昭和20)年、終戦。第十九代台湾総督安藤利吉と陳儀長官が台北公会堂で受降式を行う。
- 一九四六(昭和21)年、勅令によって台湾総督府が正式に廃止される。